



「鎮魂」の碑・・・身近にあった 80 年前の戦争を伝える

夏休みを前に、戦後 80 年に関わる本校の歴史の一端を全校集会で生徒に紹介し、平和の尊さ、当たり前の日常のありがたさを考えるきっかけ作りにしました。

学徒動員 今から 80 年以上前のアジア・太平洋戦争の末期、「学徒勤労働員」といって、学生・生徒たちが、軍需生産の労働力として組織化されました。1944 年 3 月には、向こう 1 年間の学業は事実上停止となり、全国の大学、専門学校、高等学校（旧制）、中等学校、国民学校高等科に在籍していた学生・生徒は、4 月から軍需産業へ動員させられました。



学友の死と帰郷 本校の前身である伊那高等女学校には、1944 年 7 月に愛知県の三菱重工業名古屋航空機製作所への学徒動員の命令が下りました。皆さんの先輩にあたる 270 名の 4 年生女子生徒が、8 月 1 日に向かったと記録にあります。その工場では、戦場へ向かう戦闘機「ゼロ戦」を作っていました。突然、親元を離れることになり、卒業間近の 8 か月間、マグネチュード 8 という東南海地震や、連日連夜のアメリカ軍による空襲で死の恐怖にさらされていました。戦闘機の生産拠点であった名古屋には、12 月以降、集中爆撃が本格化します。そして、1945 年 3 月 10 日には、東京大空襲によって、亡くなった方だけでも約 10 万人の被害があったとされていますが、その 3 日後の 3 月 13 日、B29 による爆撃によって、作業中であった、当時 16 歳の、飯島米子（いいじまよねこ）さんが亡くなりました。飯島米子さんの死亡によって、残りの 269 名の女学生は故郷伊那に帰ることができました。それは、工場に引率した職員が、飯島さんの学校葬をするという理由で、5 日間の休暇を会社に認めてもらい、帰郷後は、当時の校長が、国の命令に反して、名古屋に戻さなかったからです。

慰霊碑の建立 学友であった飯島米子さんを空襲で失った悲しみを背負い、一生懸命生きてきた仲間たちで、2005 年 3 月に慰霊碑を建立しました。慰霊碑の正面には、「鎮魂 ふるさとに 帰り来ませと石に彫り 生き残りたる者は 悲しむ」とあります。学友の犠牲によって自ら生きながらえてきたつらさから、恒久平和を祈る気持ちを強くして慰霊碑を建立されたのです。慰霊碑の裏側につづられている同級生の思いの一部を紹介します。

「・・・飯島さんの死を契機に、私たちは故郷へ帰ることができた。生き残った私たちは、この事実を決して忘れることはない。戦争によって学徒が、学問する権利を奪われ、死んでいった悲しみを再び繰り返すことの無いよう後世に伝えたい。この度、没後 60 周年忌を前に、同学年生一同相計ってここに慰霊の碑を建立することにした。」今年の 6 月、本校の東京同窓会に出席した折に、学徒動員のことを記録した「いのちありて」という文集に、当時のことを刻銘に書き、慰霊碑建立にあたって同級生をまとめられた、岸本多恵子さんからお話を伺う機会がありました。岸本さんは 96 歳になられましたが、大変お元気でした。

地域にあった戦争 学校外に視野を広げると、伊那市には上の原の地籍に、広大な旧陸軍の飛行場がありました。この建設には、現在の伊那北高校や上伊那農業高校の当時の生徒が動員されたそうです。駒ヶ根市の中沢小学校には、昨年の 10 月、「登戸研究所平和資料館」が開設されました。戦争中は機密にされた陸軍技術研究所として、秘密兵器や新兵器などを研究し、飯島町、宮田村、駒ヶ根市などに疎開していました。この研究所の実態解明には、かつて赤穂高校の生徒が地道に取り組んだことが知られています。